

## 喪失、再生…「端境」の旅

怪談話を次々と語っていき、語り終えると物の怪が現れる。日本古来の「百物語」の形を借りて、作家いしいしんじさんが熊本を舞台に「100ものがたり」を書き下ろした。熊本市現代美術館の「こわいな！ 恐怖の美術館」展に「出品」された作品は、怪談というより童話のよう。黒くてまろい「くま」と味付けのりみたいな「くる」の旅物語を「熊本という土地から預かったおはなし」と、いしいさんは表現する。

「土地に行って帰ってきたら、僕の中におはなしが入ってるんです。でも、そのまま書けばいいかというところでもなくて、丁寧に扱わないと変形してしまったり、『そういうんじゃないよ』って土地が悲しんだりする。預かった通り出さないといけないんです。いしいさんはそう言う。最初に熊本を訪れた時、宿で読んだ新聞に「80年前、熊本城の古井戸で足首のない妊婦の死体が見つかった」という記事が載っていた。「怖い話の方から来てくれたやん」と思ってた。それから人は薦められるが

### 起点は熊本地震

「100ものがたり」の起点は熊本地震だ。ひどい揺れでくまは「だえん形」にゆがみ、大きなひびが入った。くろは真っ黒に汚れ

ままだに「各地を巡り、土地を知る人たちに話を耳を澄ませた。阿蘇大橋、草千里、熊本城、小泉八雲旧居、トンカラリン、荒尾競馬場跡、八千代座、菊池電車、八代海、石牟礼道子さんの旧宅。くまとくろと一緒に、いしいさんはあの世とこの世の「端境のような場所」をさまよった。

物語の終盤で、おはなしはぼろぼろになり、穴があき見えなくなったりする。「でも、たとえ壊れてしまっても、もう一度読まれることで物語はつながる。一つの円環のように、最初に戻ることまでできる」といいます。

地震、水害、水俣病、コロナ禍、大切な人と別れ。喪失を抱えた全その人に向

### 亡きものの存在

崩れ落ちたジェーンズ邸や阿蘇大橋、ハーン先生、炭鉱マン。くまとくろには、透明だけれど身の回りにいる、今は亡きものたちの存在が見える。そして最後はくま自身も、火花のように一瞬で消え去る。

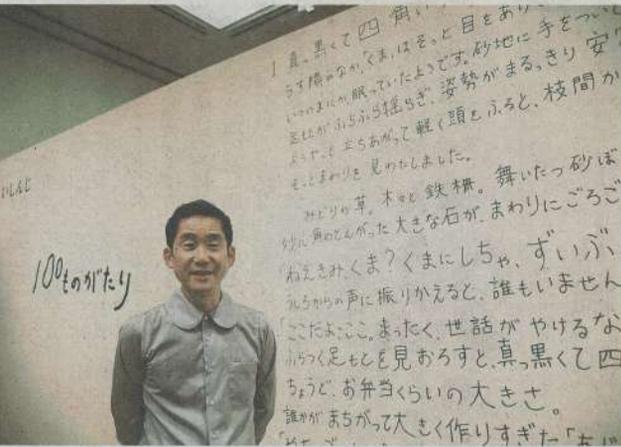
「透明っていうのは、そこにあるというところ。見えないうち、触れられないけれど、間違いないくそこにある」。いしいさんは「読んだ人の中に、透明が伝染するように」書き進めた。

「温泉が湧き出るように、惜しみなくおはなしをくれた」という熊本は「土地も人間を信用してるし、人間も土地を信用してる。地面が揺れて、人間にひびが入っても、その循環は続いている」。最後の99話を書き終えて、それはこの土地に限った話ではないことに気付いた。

世界は小さな喜びや驚きに満ちて、キラキラ輝いている。生きるといつくことは、目に見えないつながりの中で再生し続けることであること。「僕が受け取ったのは、地球のおはなしだった。熊本弁で聞かされただけで、いしいさんはそう言って、愉快そうに笑った。（小野由起子）

※「こわいな！ 恐怖の美術館」は12月5日まで。 「100ものがたり」は書籍として刊行予定。

# 熊本がくれた「100ものがたり」



「ぶらんこ乗り」「麦ふみクーツェ」などの作品で知られる作家いしいしんじさん。百物語の流儀にならい、99話からなる「100ものがたり」を、熊本市現代美術館の「こわいな！ 恐怖の美術館」展で発表した。＝熊本市中央区



会場では「100ものがたり」が原作のアニメーションも上映されている。崇城大芸術学部デザイン学科の甲野善一郎研究室の学生らが10話分を制作した